
雪風の正義の味方

水無瀬 慧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪風の正義の味方

【Nコード】

N9219X

【作者名】

水無瀬 慧

【あらすじ】

はじめまして水無瀬慧です。

PCの中身を整理していたら過去の黒歴史を発見してしまったので投稿してみました。

Fateのシロウをゼロ魔に放り込んでみた。よくあるような最近見ないような内容です。よろしければどうぞ。

ACT・i（前書き）

書いたのいつ頃だろ確かまだ学生だった気がする。
更新は不定期です。

ACT・1

大平原の真ん中に一人の少年が寝転がっていた。

見た目は10歳ほどで着ている服はなぜかだばだばでサイズが合っていない。身長130?ほどの赤毛の少年だった。

どうしてこんなことになったのか実はよくわかっていない。

「なんでさ」とは彼の呟いた言葉。

とりあえず思い出してみよう、あの夜のことを――。

飛び込んだのは穴の中だった。追いつめた英雄王の鎖に絡めとられやつを救ってしまいうらいなら、とその身を犠牲にした。遠坂には悪いと思いながらも暗き孔に飛び込んだ。

「バ――正氣が貴様ああああ……!!!!」

そこから先の記憶はない。ただ堕ちているはずなのにいつしかわからなくなつて昇っているような錯覚に陥つてこと、身体感覚はなく衛宮士郎という感覚になつてしまった気がしたこと、黒い太陽に飲み込まれた気がしたこと、全てあいまいだけどなんとなく感覚としてそれだけは覚えていた。

だから何故、今、自分が、こんな月が空に二つも浮かぶ世界にいるのかはわからないし一緒に堕ちたはずの英雄王ギルガメッシュがどうなったのかなんてどうでもよくなっていた。そんな彼が自分の外見の変化に気づくはずもなかった。

ACT・1

そこは死地と言って良かった。吹き荒れる暴風、天候は曇天、山頂でうなり声を発しその背にある両翼をはためかせるは人の姿をしない種族ではおそらくは最強、魔風のごときスピードと灼熱のブレス、山の一角と錯覚してしまうほどの体躯。もはやそれはつい先日召喚した使い魔の韻龍シルフィードとは比べ物にならないものだった。いや、迫力とは無縁のシルフィードと比べるのはいささか相手に失礼だったかもしれない。

ともかくこのような相手を倒すことが出来たのならその功績はたたえられ賛美され語り継がれるものになる、そのぐらい今回の相手は強大だった。

何故こんな相手を討たなくてはならなかったのか、それは王室の勅命だった。

彼女は北花壇騎士、ガリア王国に存在する三つの騎士団、その他に最も困難な仕事、要人暗殺・怪物退治といったものを優先してまわされる公には存在しない北花壇警護騎士団その中でも七号と呼ばれその強力な雪と風の魔法は噂になるほどのもの、その彼女に厄介ごとを押し付けるかのように王室は「王国の果てに山にある山脈は知っていて？今あそこの山にふもとの村を荒らす黒竜がいるそうなのよ」つまりは倒してこい、そう言ったのだ。

王室の命となれば騎士である彼女は従わないわけにはいかないとして今彼女はこの黒竜と対峙しているのであった。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラス……」

彼女はルーンを紡ぎ竜がブレスを吐き出す前に先手を取った。その魔法は《氷嵐^{アイス・ストーム}》氷と風からなる美しくそして触れるものを両断する刃を纏った暴風である。

風を切り裂く大きな音が轟き目の前の竜に襲い掛かった。その魔

法はどんなものでも切り裂き吹き飛ばすかと思えた。

しかし・・・竜は避けるでもなくましてやプレスで応戦するでもなくただアイス・ストームをその身に受け平然としていたのだった。その硬い鱗に彼女のトライアングルスperlが通らなかった。

相手の防御力がこちらの攻撃力を上回った、ただそれだけの単純な理由だがこれほど恐ろしい差はない、魔法がだめなら格闘でというわけにはいかないのが一般的な貴族だし彼女に関してはその小さく細身な体軀から格闘技が得意とも思えない、つまり今放った魔法が効かないとなると他の魔法も望み薄になってくる。

手詰まり、今の一撃だけで明確になった相手に対した自分の状況である。

それから先は防戦一方、フライを唱え空中を縦横無尽に飛び回り相手の攻撃を何とかかわしているが相手は竜、空中戦でかなうはずもない。どうにか突破口を見出そうと相手をよく視てその特徴、弱点になり得そうなポイントを見つけようとしているのだがうまくいかない。このままだといずれ精神力が切れて逃げることも出来なくなりこの竜に殺される。彼女の脳裏にそうなってしまった自分の姿が思い浮かんだ。

その一瞬の恐怖が運の尽きだった。その恐怖とともに生まれた隙を竜が見逃すことはなく彼女は尾による一撃で山肌叩きつけられることになった。

もはや致命傷ではないかと思われるその一撃を受けて感情表現に乏しい彼女が苦悶の表情をその顔ににじませた。服はところどころ破け身体は軋み立ち上がることもさえも出来ない。

追い討ちを掛けようと竜はその口からプレスを吐き出すためにのどを唸らした。そうして吐き出されたプレスは彼女の倒れているその周囲を焦土と化すような強烈なプレスを噴いた。

「……母さま」

彼女はそう呟いた。なんとしても果たしたかった目的があった。また、母さまと楽しい日々を過ごしたかった。そうおもつと涙がこぼれそうになった。

「ごめんなさい、母さま」

そう言つて彼女は気を失った。

もう現実の音は遠く微かなものになっていた。

彼女が目を覚ましたのは洞窟の中だった。日付はわかりちようど昼ごろだった。目を覚ましたものの身体を起こすこともうまく出来なくなっていた。そのときの身体の軋みによる痛みで全てを思い出した。自分が竜に負けたことそのブレスで焼き尽くされるはずだったこと。

「ああ、もう起きて平気なのか？」

その声は洞窟の奥から聞こえてきた。男の声そして自分の記憶にはない声、それを発したのはおそらく自分と同じくらいの歳の白髪で褐色の肌をした少年だった。

「平気」

えらく簡潔な応えに少年は少しとまどったが気にするわけでもなく手に持った食料を料理するため薪に火を灯した。彼はどこに隠していたのかフライパンを手品のように取り出し料理を始めた。

「よく食べるな」

「美味」
「そりゃよかった」

けが人とはいえお腹のすいていた彼女はあっさり彼の作った3人前はあるうかという量の食事を平らげた。彼がどうやら竜を退治したらしい、料理をしている最中に聞いたのだ。

私が倒れたところで現れたらしく救いだし安全なところまで逃げた後、退治に向かったらしい。

「名前」
「なんだ」
「あなたの名前」
「えつとシロウだ。シロウ・エミヤ」
「タバサ」
「タバサ？」
「私の名前」

それが会いだった。

何でも彼はふもとでこの竜に関して噂を聞いたらしくその真偽を確かめようと単身山に乗り込んだ。

彼はふもとの町までタバサを運びその傷が癒えるまで彼女の面倒を診た。といっても水魔法で彼女の傷はすぐによくなり体力が戻るまで共にいただけだった。

だから三日も経たないうちに二人は別れそれぞれ行くべき場所に向かっていった。

これが3週間ほど前のお話。

白髪で褐色の赤いマントを羽織った少年が歩いていた。

今、トリスタニア王国では3人のメイジの話題で持ちきりだった。音に聞く盗賊『土くれのフーケ』を捕らえた3人の貴族の少女た

ちのことである。しかし、あまり表ざたにはなっていないのだが実はそのフーケをとらえた本当の人物はその貴族の使い魔の少年という噂が流れている。もちろん噂は噂、誰も信じない。この世界において平民が貴族に勝つなどということは早々ありえることではないしそれもあの悪名高いフーケが平民のしかも少年に捕らえられるなんて信じるものはいなかった。

しかし、彼は違った。その噂を詳しく聞くと何でもその少年は変わったいでたちをしているらしい。それは

黒髪で黒目の少年

ある貴族の使い魔

身の丈ほどの剣を使いこなす

噂を聞き集めていく中で彼は『ある貴族の使い魔』という点に強く興味を示した。

使い魔ということは召喚されたということである。

召喚とは『他の世界からの召喚』『空間転移による同一世界からの召喚』の二つに分けられる。この世界には黒髪黒目のそんな東洋人のような家系はほとんど存在しない。ここはおそらく故郷の世界で言うヨーロッパのほうの民族が多く住む土地だ。いや技術力的にいつてそんな遠くまで移動する手段はあまり確立されていない世界だからもしかしたらこの大陸にいないだけでこの世界にも東洋人の住む場所はあるかもしれない、が彼は何故だかその少年が『他の世界からの召喚』である気がしてならなかった。

だから、シロウ・エミヤはそれを確かめるため今トリスタニア王国のトリステイン魔法学校に向かっていた。そして二日ばかりで港町ラ・ロシエールについたところだった。

しかしラ・ロシエールは異様な空気に包まれていた。町はアルビ

オンの内乱から帰ってきた傭兵が多くいた。

今、アルビオン王国は貴族による内乱で王党派が倒れようとしていた。その王党派に雇われていた傭兵たちである。雇い主の状況が悪くなれば最後まで付き合わずに逃亡、命をかけてまで敗戦に付き合うことはない、それが彼らの考えであった。

まあ少しぐらいぴりぴりした空気なのは仕方がないと思って別段どうするでもなく休憩のため宿付きの酒場に足を踏み入れたシロウだったのだがその中はさらに異質だった。

奥の大きなテーブルでは数人の貴族が大騒ぎをしているのだが今足を踏み入れた手前の入り口側テーブルには今にも戦いだしそうな緊張感を持った傭兵たちが、なるべく不自然にならないようまるで取り繕うように騒ぎながら食事をしている。それは異様な光景だった。

「タバサ？」

シロウはカウンター席に着き食事を頼むと改めて店内を見渡した。やはりなんだか異様な光景である。どんよりと盛り上がるテーブルと騒ぎすぎなくらいうるさいテーブル。とても対照的だった。

その中に一人の少女を見つけた。それは少し前に黒竜の住む山で助けた貴族の少女だった。あんなに騒いでいる中にいながらいつもと変わらぬポーカーフェイス少しすごいと思った。

「でも何でパジャマなんだ」

そう呟いて声をかけることもないだろうと出された料理に口をつけようとしたそのときだった。

「！？」

地響きのような重たくお腹に響く音とともに酒場の扉が壊されいきなり傭兵の集団が現れた。それとともに先ほども入り口近くのテーブルで食事をしていた傭兵たちも胃を被りいつの間にか完全武装をしてタバサたちのいるテーブルを取り囲んでいた。

「なんでさ」

呟いたときにはもう遅かった。突入の瞬間、タバサたちのテーブルはひっくり返りそれを盾にするように皆隠れていた。銃弾がくることを予測したのだろっという判断だと思う。

しかし流れ弾は無情だった。シロウの一度も手をつけていない料理に被弾した。

それはさておきタバサたちは魔法を放ち相手と一定の距離を保っていた。さすがに相手も素人ではない最初の魔法でタバサたちの魔法の射程を読みその外まで後退した。ここから先は持久戦になるだろう。魔法を撃たせて精神力を使い切った貴族を叩く、これが平民の傭兵の常套手段だからだ。しかも外には巨大な足が見えているおそらくゴーレム。このサイズにもなるとおそらくトライアングルクルスのメイジだろうそうなればこの持久戦ほぼ勝利は傭兵側にある。

「ほおつてはおけないか」と呟いたシロウは両者のちょうど中間に進んだ。そして傭兵側に向き声を発した。

「事情は知らないが勝敗はもう決しただろ？ 終わりににはならないか」

あっけにとられたのは味方されたはずの貴族側である。

「ちよつとなに！？」

その言葉に赤毛で褐色の豊満な女性が反応した。「冗談を言ってるんじゃない」といつている風だった。しかしそれを青い髪の少女タバサが取り押さえ彼女にしては強引に、口を手でふさぎ押さえた。

そして目の前にいる男、シロウを見据えた。シロウも一瞬タバサを見た。

「ふざけたこというじゃないのあんた」

奥から緑色の髪をした女性が出てきた。おそらくフーケだろう何でも脱走したと聞いた。

「あんた貴族？」

いぶかしげな顔でシロウに問いかけた。

「なんでもないただの旅人だ」

「へえ、平民にしては見所あるじゃない。・・・でもね、それは出来ない相談さ!!」

フーケが声を上げた瞬間周りの傭兵が手に持つ銃をシロウに向かって掃射した。

誰もが死んだと思った。

しかし、結果はそこにいる全ての人物を裏切った。いや、タバサだけは彼が生きのびることがわかっていたかもしれない。

シロウは何をするでもなかった。ただ顔に迫る銃弾だけいつの間にか手に持っていた双剣で防いだ。それだけで身体に迫る銃弾には何の対処もしなかった。

しかし、銃弾は命中したにもかかわらず彼に傷がつくことはなく悠然と立っていた。

「あんた、エルフかなんかい」

フーケの疑問ももつともだった。銃弾を防ぐマントなんて彼女は知らない。

「いや人間だぞ」

即答だった。

そして、シロウの身体が傾いたかと思いきや疾風のごときスピードで目の前にいる傭兵まで踏み込みいつの間にか構えた双剣で切り伏せていた。

それからもう一方的だった。いつ踏み込まれたのかわからずにいきなり倒れた仲間に動揺し統率を失った傭兵と堅実なまでに堅固な剣技を披露する少年、そこにいる貴族も含めほとんどが動揺で動けなくなってしまうていた。そんな中に一人、彼に加勢した少女がいた。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウェンデ」

その少女、タバサはシロウに駆け寄りすばやくウィンディ・アイシクルのルーンを紡ぎ剣の届かないところにいる敵の傭兵に向かって氷の矢を放った。

戦闘は一分かからずに終わった。戦力が違いすぎたのだ。しかも二人はお互いの役割をしっかりと把握し片方が攻める間に片方が大きな魔法を唱えるといったとても模範的な戦いをして見せた。模範的な戦い、一見すると凡庸だがそれでいて効果的な戦いだった。

「また、助けられた」

酒場の真ん中でタバサがシロウに向かいそう言った。

「借りとか言うなよ、さっきは魔法で援護してもらったんだし」

そう言うとタバサが無表情な瞳でシロウをじっと見つめた。

「わかった。貸しとくよ」

そういうとタバサはうなずいた。

場が収まってあっけに取られていたタバサの仲間の貴族たちが出てきた。人数が最初見たときよりも少ないのは二手に分かれたからだろう。

「お礼は言つとくわ。私はキュルケ、キュルケ・フォン・ツエルプストー。それで、あなた何者？」

赤毛で褐色の肌を持つ女性が言った。

「シロウ・エミヤただの平民だよ」

「ただの平民が魔法を使えて？」

「……？ 魔法なんか使えないぞ」

「じゃあどうやってあの剣、取り出したのかしら？ 戦っているときに見えたけどあなたの体どこにも剣を着けるような所なかったわよ」

いい眼をしている。シロウはそう思ったがそれどころではないことに気がついた。

「話はそこまで、外のゴーレムにつぶされそうだ。急いで出るぞ」

シロウはそういつてタバサの手をひいて酒場の外まで走りそれにキュルケともう一人の貴族、金髪の少年が続いた。

いつの間に移動したのかフーケは巨大なゴーレムの肩の上に乗っていた。今しがた、突撃を命じた連中はあっけなく二人の平民と貴族に倒された。隣に立った仮面に黒マントの貴族に、フーケは呟いた

「いいのかい、あれ」

「多少は予定外だが、あれでよい」

「あれじゃあ、あいつらをやつつけることなんかできないじゃないの！」

「倒さずとも、かまわぬ。分散すれば、それでよい」

「あんたはそうでも、私はそうはいかないね。あいつらのおかげで、恥をかいたからね」

しかし、マントの男は答えない。耳を澄ましたようにして立ち上がると、フーケに告げた。

「よし、俺はラ・ヴァリエールの娘を追う」

「私はどうすんのよ」

フーケはあきれた声で言った。

「好きにしろ。残った連中は煮ようが焼こうが、お前の勝手だ。合流は例の酒場で」

男はひらりとゴーレムの肩から飛び降りると、暗闇に消えた。まさに、闇夜に吹く夜風のように、やわらかく、それでいてひやりとするような動きであった。

「まったく、勝手な男だよ。なに考えてんだか、ちっとも教えてくれないんだからね」

フーケは苦々しげに呟いた。

『女神の杵』亭の中から一人の平民と三人の貴族が出てきた。

「ええいもう！ 全員まとめてつぶしてやるよッ！」

「さてどうしようか」

シロウがゴーレムを前に呟いた。

「あんたのその細い剣じゃこのゴーレムに傷もつけられないよ！」
「じゃあ弓で」

自慢げに喋るフーケにシロウはどこからともなく弓を出し構えた。

「は・・・ははははは、あんた私を笑い殺す気かい。そんな弓、刺さりもしないよ。なんなら試してみるかい」

「じゃあ一度だけ」

シロウはそう言ってまたも手品のようにマントの中から螺旋のような剣を取り出した。皆があっけに取られた弓でゴーレムに立ち向かうその上、弓に番えるのは矢ではなく剣ときた。

「偽・螺旋剣（カラドボルグ？）」

それはもはや冗談には見えなかった。フーケは本能で恐怖を感じ取りまわりのタバサたちもその矢にあたっではいけないと直感した。シロウは番えた矢を、弦を引きそして放った。

直後だった。視認できたものはこの中にはいないであろう一撃はゴーレムを空間ごと捻じり切りその身を崩壊させた。

「これで終わりだな」

崩れるゴーレムの立てる轟音の中シロウはそう呟いた。

ゴーレムが崩れたときに舞い上がった土煙にまぎれてフーケは逃走したようだった。その後ひと段落付いたところでタバサがシロウに近寄ってきた。

「何故？」

「ここにいるのはちよつとトリステインの魔法学校に用事があったからなんだ。何でも黒目に黒髪の平民の使い魔がいるって聞いてね」

「それってダーリンの事じゃない！さっすがダーリン！世界中で噂になってるみたいね」

理由を言うとキュルケがそれに反応した。

「知り合いなのか」

「さっきまで一緒だった」

「二手に分かれたんだ。任務があつたからね、こっちが足止めだ」

今まで一度も喋らなかつた金髪の少年が説明をした。

「ええと」

「ギーシュ・ド・グラモン、先ほどは助かったよ」

「シロウ・エミヤ、ただの平民だ」

「それは嘘だろう、あの矢として弓に番えた剣はいったいどこから取り出したんだい？ さっきは双剣を取り出し次に弓に違う剣、そのマントの中には収まりそうにない。ああいう芸当ができるのは士系統のメイジだろう、しかもかなりハイレベルの」

「へーあんたにしてはいい目してんじゃないの」

「だって納得ができない、僕だって剣を練成することぐらいはできるがそれを弓矢として使うなんてそんな器用なことできないしまずしようとは思わない。だってあんな威力出せるわけがないからね」

ただ弓矢を打つぐらいならゴーレムを召喚したほうがいい」

茶々を入れるキュルケにも動じずギーシュはシロウを聞いたのだ。
た。

「なにもメイジじゃないとは言っていないだろ。……まあ土系統だけをひたすら極めたメイジとでも思ってくれ」

そうは言ったもののシロウはこの世界の魔法についてほとんど理解していなかった。自分のやっていることの特異性は理解できても教えてもらったこととすらないこの世界の魔法については魔術よりもわからなかった。

「じゃあなに、あんたドットのメイジだって言うの」

「そうなるね」

こんな強いドットがいてたまるものか、といった顔をキュルケがしていた。

「それはそうと、追いかけていいのか？」

そうタバサに聞くと彼女は指笛を鳴らした。

「ちょっとタバサ、追いかけるつもり？ アルビオンまではいけるだろうけどルイズたちのいるところはわからないわよ」

「それは大丈夫だ、僕のヴェルダンディがいるからね」

ギーシュの足元には大きなモグラ、もといジャイアントモールが顔を出していた。

「僕のヴェルダンディは一度かいだ宝石の匂いは忘れないからね」

ルイズのもっていた指輪を追うことができる」

「じゃあ決まりだな、アルビオンというところは今は内戦中だろ？ 彼に死んでもらっては困る」

指笛に呼ばれたシルフィードも降りてきた。

「キュイキュイ」

青い巨大な竜だ。一見恐い感じもするがその鳴き声と甘えっぷりを見てしまうとどうも竜に見えない、竜なのだが。

「シルフィードか久しぶりだな」

出てきた直後からシロウにすりより嬉しそうにしている。

シロウは今まで自分の羽織っていた赤いマントをタバサの肩にかけた。マントの下は黒のパンツに長袖のグレーのYシャツだった。色違いの制服のようにも見える。

「ありがとう」

「さすがに空でそれは寒いだろ、長時間になりそうだし」

キュルケたちはすでにシルフィードに乗っていた。タバサとシロウが跨るとシルフィードは大きな翼を羽ばたかせアルビオンに向けて飛び立っていった。

飛び立ったシルフィードの上でキュルケがタバサにシロウのことをきくことにした。

「タバサとあのシロウってどんな関係なの」
「恩人」

表情も変えずタバサはそう言った。

「好きな人とか？」

「恩人」

「聞くなつてことね。わかった、聞かないわ。でも、あなたが信頼しているなら私も信頼するわ。でも一つだけあの人はメイジ？」

「メイジじゃない」

「わかったわ」

そしてキュルケは聞く相手を変えたシロウ本人に聞きたいことがあったのだ。

「あなた、どこの国の人」

「一応、ガリアになる」

「そう、何をしている人なのかしら？」

「フリーランスの傭兵兼トレジャーハンターだ。といっても両方ともほとんど廃業中だけだな、二つとも生きるのに困ったときやっていただけでもう何年もやっていない。しいて言うなら今は旅人だ」

シロウは肩をすくめながら言った。

「今は寝とけ体力も魔法に必要な精神力も回復していないだろ、特にタバサちよつとはいえ魔法を使っただんだシルフィードは見ておくから少し眠るといい」

シロウはもぞもぞと移動しタバサの座っていたところ、ちよつどシルフィードの首もとのあたりに近寄りその位置が変わろうとした。

「ここがいい」

何を言ってもまっすぐ行く先を見つめてこのとおりである。頑なに動こうとしない。

「じゃあそこでいいよ」

シロウはタバサの後ろからシルフィードに跨りその身を支えることにした。タバサは驚き振り向こうとするがシロウが「眠るんだ」そう耳元でささやくとタバサはすんなりと眠りに落ちた。

「ちよつと何したのよ！」

「すんなり眠るように暗示をかけた。不意打ちだったから素直に効いたらしい」

「まあ・・・いいわ」

「キュルケも眠ったほうがいい先は長そうだ。旅を見張るのは平民の役割だろ」

「・・・そうさせてもらっわ」

ギーシュはシロウが言うよりも早くすでに眠っていたしキュルケもタバサの恩人と聞いて驚きはしたものの疑いの目はもうなかった。

「さあシルフィード、頑張ってくれよ」

夜の闇の中、シルフィードはアルビオンに向け天高く翼を羽ばたかせていた。

空を翔ること半日ようやく雲を抜けアルビオン大陸にたどり着いた。

ギーシュはヴェルダンディを岸壁からもぐらせその後につきキュルケもそれについていくことにした。

「あなたは、ガリアの」

「黙っていてわるかっただな、シャルロット」

その名前を聞いた瞬間、タバサは杖を構えた。

「何者」

「悪いと思っただけちょっと調べさせてもらった。あんなところに一人で挑むメイジがいるとは思えなかったからな。シャルロット・エレヌ・オルレアン、現在のジョゼフ王の弟のオルレアン公の娘、ガリア北花壇騎士・七号。その若さにしてシュバリエの爵位を持つトリアングルメイジ」

「何が目的」

タバサの目には敵意が浮かび同時に焦りがあるようにも見える。

一方のシロウは何も構えずにただ話を続けていた。

「一つだけお願いを聞いてもらいたいんだ」

「なに」

「トリステインに行くときにタバサの執事ってことにしてもらえないかな」

「それはなぜ」

「サイトだっけ？彼に話を聞く時間がほしいのもあるし、何より故郷と同じにする人と同じ場所にいたいんだ。六年彷徨ってやっと見つけたんだ」

彼は遠い眼をしていた。

「貸しがある」

「そう言ってもらえると助かる」

それに、タバサは彼と敵対しなくなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9219x/>

雪風の正義の味方

2011年11月11日09時26分発行